

2 全国レベルのエコロジカル・ネットワークの現況及び将来について

2.1 生物多様性から見た国土のとらえ方

日本はユーラシア大陸の東縁辺に位置し、日本海をへだて大陸とほぼ平行に連なる弧状列島である。気候帯として亜熱帯から亜寒帯までを含む。北海道、本州、四国、九州という主要4島のほか、約3,000の島嶼から構成されている。面積は約38万km²であり、太平洋側には、千島海溝、日本海溝、南海トラフ、琉球海溝、伊豆-小笠原海溝が、背後にはオホーツク海、日本海、東シナ海、フィリピン海がある。南からその規模において世界最大の海流の一つである黒潮が、北からは親潮等が流れている(図2-1)。

日本列島は、標高3,000m級の山々を擁する、太平洋北西端にそびえる一大山脈で、陸上の国土に占める山地面積が大きく、自然条件のもとに成立する植生は、大部分が森林で、国土面積の約66.4%を占める。

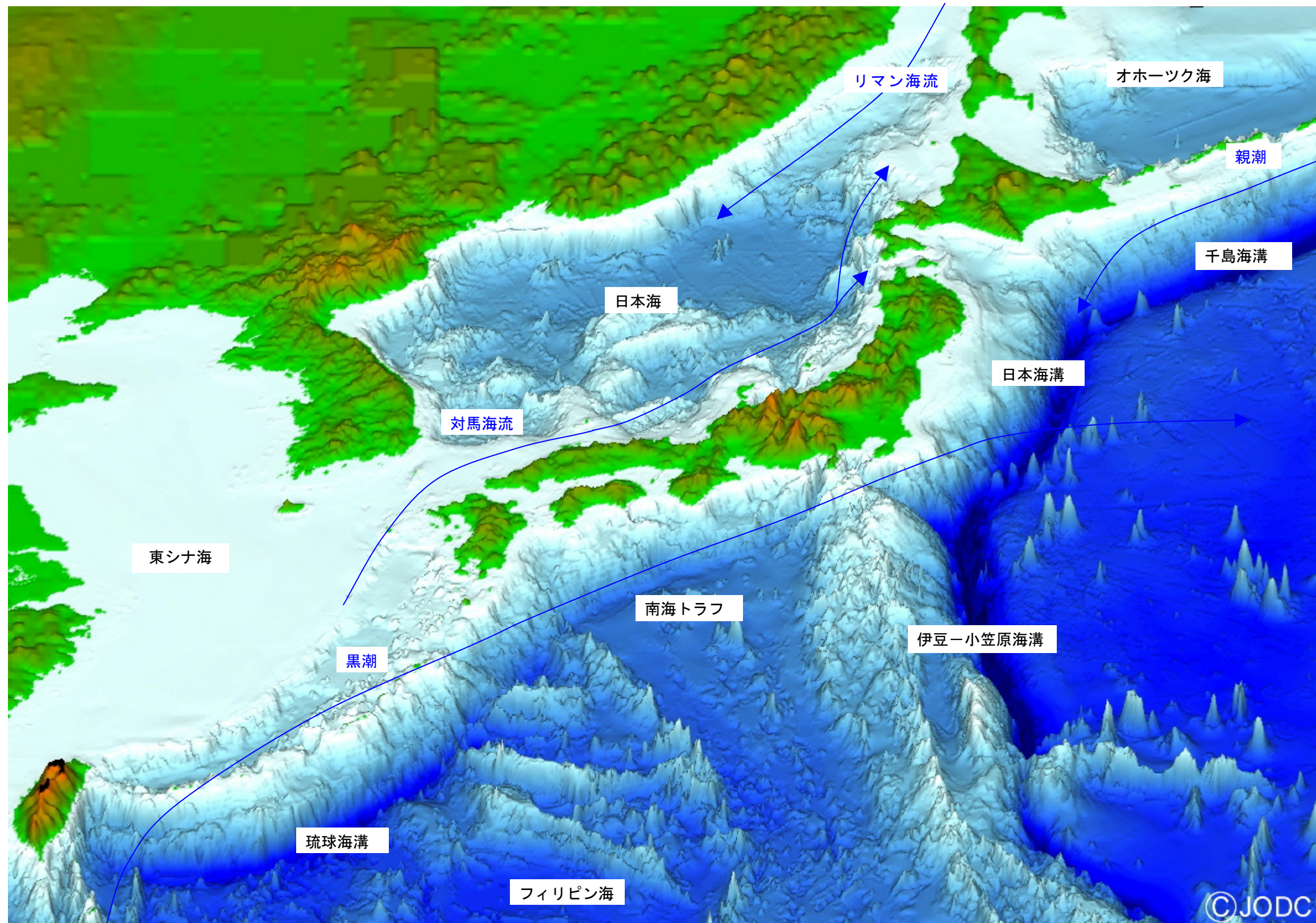


図 2-1 日本の地形

出典：国土交通省海上保安庁海洋情報部資料を一部改変

<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN9/sodan/kaiteitikei/japan006.jpg>

平成 19 年 11 月に閣議決定された「第三次生物多様性国家戦略」において、わが国の国土は、陸域と海域に先ず大別されるが、生物多様性の観点、つまり生物相と人間の活動の関係から、次の 7 つに区分することが考えられるとされている。

- ①奥山自然地域……相対的に自然性の高い地域
- ②里地里山・田園地域……①と③の間に位置する自然の質や人為干渉が中間的な地域(人工林が優先する地域を含む)
- ③都市地域……人間活動が優先する地域
- ④河川・湿原地域……各地域を結び付ける生態系ネットワーク（エコロジカル・ネットワーク）の軸となる水系
- ⑤沿岸域……海岸線を挟む陸域及び海域
- ⑥海洋域……沿岸域を取り巻く広大な海域
- ⑦島嶼地域……沿岸域・海洋域にある島々

本構想においては、後述する指標種の観点からの重要地域の検討において、沿岸域、海洋域、島嶼地域にまたがる指標種を選定したことから、⑤⑥⑦を「沿岸域・海洋域・島嶼地域」とし、大きく次に示す 5 つの地域に区分した。5 つの地域及びその概況は表 2-1 の通りである。

表 2-1 生物多様性の観点から区分される 5 つの地域及びその概況

①奥山自然地域	脊梁山脈などの山地で、全体として自然に対する人間の働きかけが小さく、相対的に自然性の高い地域。国土の生物多様性の中では、いわば屋台骨としての役割を果たす地域。現在、国土面積の 2 割弱を占める、自然林と自然草原を合わせた自然植生の多くがこの奥山自然地域に分布している。
②里地里山・田園地域	奥山自然地域と都市地域の間位置し、自然の質や人為干渉の程度においても中間的な地域。里地里山のほかに、人工林が優占する地域や水田などが広がる田園地域を含む広大な地域で、全体として国土の 8 割近くを占める。 里地里山は、長い歴史の中でさまざまな人間の働きかけを通じて特有の自然環境が形成されてきた地域で、集落を取り巻く二次林と人工林、農地、ため池、草原などで構成される地域概念。その中核をなす二次林だけで国土の約 2 割、周辺農地などを含めると国土の約 4 割を占める。
③都市地域	人間活動が優先する地域。高密度な土地利用、高い環境負荷の集中によって、多様な生物が生息・生育できる自然空間は極めて少なくなっている。
④河川・湿原地域	河川、湖沼、湿原、湧水地などの水系。地球上の多くの生命にとって欠かせない、生物多様性の重要な基盤。森林、農地、都市、沿岸域などをつなぐ国土のエコロジカル・ネットワークの軸としての役割ももつ。
⑤沿岸域・海洋域・島嶼地域	沿岸域は、複雑で変化に富んだ海岸、その前面に位置する干潟、藻場、造礁サンゴ生息域などの浅海域を含む、産業やレクリエーションなどにも利用される人との関わりが深い地域。海洋域は、沖合いから外洋へと広がる国土の約 12 倍の広さの排他的経済水域などを持つ地域。深海に至るまでさまざまな生態系がある。島嶼地域は、北海道等の主要 4 島以外の島嶼を総称したもの。わが国には 3,000 以上の大小さまざまな島嶼がある。

